

# 県営中山間総合整備事業筑北地区

## 埋蔵文化財発掘調査報告書

さか きた むら

### 坂北村

ひがしばた い せき

### 東畠遺跡



——谷あいに生きた縄文人のぐらし

2005.3

長野県松本地方事務所  
坂北村教育委員会

「坂北村 東畠遺跡」 正誤表

訂正箇所	誤	正
P45:分析レポート1の説明文中の表右下部分	実年代の確定(西暦表記)とその確立	実年代の確定(西暦表記)とその確率

県営中山間総合整備事業筑北地区

埋蔵文化財発掘調査報告書

さか きた むら  
**坂北村**

ひがしばた い せき  
**東畠遺跡**



——谷あいに生きた縄文人のくらし

2005.3

長野県松本地方事務所  
坂北村教育委員会



## ごあいさつ

東畠遺跡は坂北村役場から西へ約3km、仁熊地区の麻績川が蛇行して巡る段丘上にあります。ここは筑北地方では古くから知られた遺跡であり、土器や石器を拾った経験のある村人も大勢居ります。

この度、農地整備工事により遺跡の破壊が避けられない状況であったため、本格的に発掘調査を行うこととなりました。坂北村教育委員会は事業主体の長野県からの委託を受け、長野県埋蔵文化財センターの指導のもと、調査を担当して進めてまいりました。

平成15年5月に着手した発掘調査では、その進行とともにこの遺跡が予想をはるかに超える大規模集落であることが判明し、翌春には水稻を作付けするという時間的制約の中、急速一部を盛土保存に変更する等いくつかの調整を図りました。その結果、平成15年10月末日と決められた期間内に厳しくも濃密なる現地調査を終了いたしました。

発掘調査から得た遺物や記録類もまた予想を上回る数量でした。平成16年度はこの資料の整理や土器復元、分析といった地道な業務をひとつひとつ積み重ね、記録保存することに努めてまいりました。

この報告書は、地元の教育委員会が調査を担当してきた経験を考慮し、村民の皆様が手にとって親しみ易く、内容・解説も理解し易い表現といたしました。なお、詳細で専門的記録やデータ類はCD(2枚)に収め、本冊とセットの体裁といたしました。

筑北に栄えた縄文のロマン、東畠遺跡の調査から得た貴重な成果を盛ったこの報告書の刊行を喜びとともに、多くの皆様に活用されますことを期待するものであります。

最後となりましたが、調査実施と報告書作成にあたり、ご協力ご指導をいただきました地権者の皆様、酷暑の夏を耐えて従事されました発掘補助員の皆様、繊細緻密な業務に携わられました整理補助員の皆様、そして長野県、長野県埋蔵文化財センターを始め連携して業務を進めていただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

平成17年3月

坂北村教育委員会

教育長 柳澤 純



## 目次

ごあいさつ	3
第1章 遺跡の位置	
地理的位置	7
遺跡をとりまく環境	8
周辺の遺跡	12
第2章 集落のくらし	
遺跡の微地形と基本土層	14
縄文時代の足跡を探る	15
みつかった足跡とその性格	16
「縄文土器」という道具	36
分析レポート1	45
土器付着物や炭化材から年代を測る	
分析レポート2	46
土器の粘土から産地を探る	
石でつくった道具	48
分析レポート3	50
石器からみたムラの生活	
人々が食べていたものは何か	51
分析レポート4	52
石器はどう使われた?	
心といのり、そのかたち	54
東畠ムラの秋の風景	58
第3章 周辺地域との交流	
土器や石器が来た道	60
分析レポート5	62
きれいな石はどこから来たのか	
釣り針の形をした石器	63
縄文時代の信濃と越後の交流	64
第4章 集落の移り変わり	
縄文という時代	66
東畠ムラ、1,500年の歴史	67
住居の移り変わり	68
第5章 調査の記録	
発掘調査が行われた理由	82
遺跡を保護する	84
第6章 これから 東畠遺跡	
遺跡に訪れた皆さん	90
子供たちと縄文時代	91
東畠遺跡速報展	92
文化祭	93
資料の保管と遺跡の現状	94
坂北村と東畠ムラ、これから	95
成果と課題	96
あとがき	97
引用・参考文献	98
図版目録	100
用語かいせつ	103
寒測図版	105
坂北村の歴史	117
筑北地区の遺跡・指定文化財	118
筑北地区的遺跡・文化財マップ	
東畠遺跡全体図	
調査体制/執筆分担	
協力者・協力機関一覧	
報告書抄録	

## 例言

- はじめにこの報告書は、長野県中山間総合整備事業筑北地区、圃場整備事業にかかる、東畠（ひがしばた）遺跡発掘調査報告書です。
- 1 本書は、県営中山間総合整備事業筑北地区、圃場整備事業にかかる、東畠（ひがしばた）遺跡発掘調査報告書です。
- 2 東畠遺跡は、長野県東筑摩郡坂北村仁熊8031番地ほかに位置します。  
(遺跡番号 県4660・村12)
- 3 試掘調査、本調査および報告書作成業務は長野県松本地方事務所の委託を受けて、坂北村教育委員会が実施しました。
- 4 平成15年・16年度ともに調査と報告書刊行について、財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターに技術指導を委託しました。
- 5 試掘調査は県教育委員会の指導のもと、平成14年2月20日～22日まで実施しました。
- 6 本調査は平成15年5月15日から10月31日まで実施し、その後、16年3月25日まで基礎整理業務を実施しました。
- 7 平成16年度は報告書作成業務を、4月22日から17年3月25日まで実施しました。
- 8 平成15年・16年度ともに費用の一部に国庫補助金の交付を受けています。
- 9 本報告書は本文編とデータCD2枚（1：データ編、2：画像・動画編）で構成されています。
- 10 本書およびCDの編集・校正は、村教委勝田智紀と県埋蔵文化センター柳澤亮が担当しました。
- 11 業務の分担、本書の執筆者は巻末に記しました。
- 12 本事業の実施にあたりまして、多くの機関、個人の方々よりご協力を受けました。巻末に記して感謝の意を表します。

# 第1章

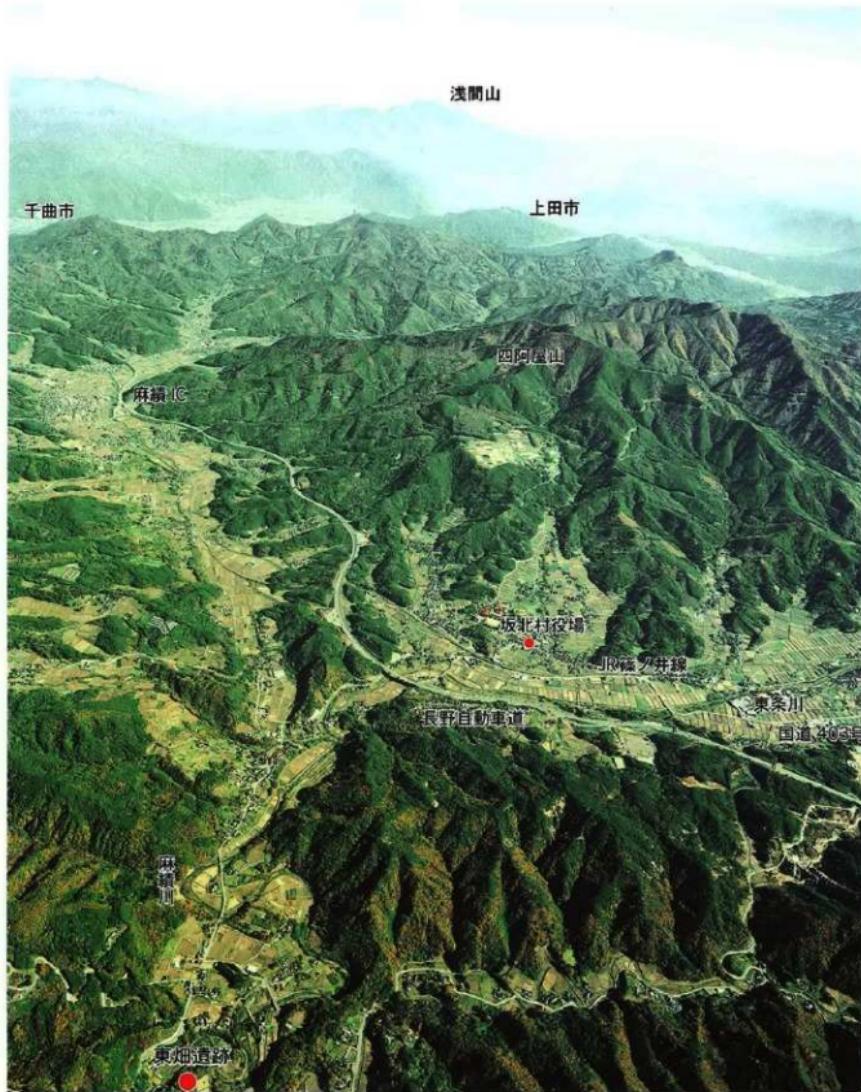
## 遺跡の位置



坂北村は長野県の中信地方、東筑摩郡の北端の通称「筑北（ちくほく）」とよばれている地域に位置します。坂北村のほか、麻績村、坂井村、本城村の筑北4ヶ村は大小の山々に囲まれた山村です。その村々を流れる河川は坂北村で合流し、麻績川となって犀川へ流れ込んでいきます。その犀川も長野市で千曲川となり、さらに北上して信濃川と名前を変えて日本海をめざします。

東畑遺跡は蛇行する麻績川によってつくられた段丘上に営まれた縄文時代の集落（ムラ）の跡です。





1 遺跡上空から浅間山を望む

(2000年秋)

# 地理的位置

## 日本海に注ぐ信濃川の支流



2 日本列島の中の東堀遺跡

坂北村は本州のほぼ中央の内陸地域に位置する。降水量が少なく、年平均1,000mm前後。降水型は太平洋型を示すが、日本海に70kmと近いため冬季の積雪は北の影響を受ける。



3 信濃川の支流、麻績川

麻績川は日本最長の川、信濃川の支流である。松本平から流れ来る犀川へ合流し、善光寺平では曲千川へ、そして北上して、新潟県で信濃川と名前を変えて日本海をめざす。



4 坂北村全図

麻績川は、冠着山や大林山に源を発し、本城村から流れる東条川をはじめとする複数の支流の水を集め、蛇行しながら筑北の谷を西に流れる。やがて坂北村仁賀、赤松地区より差切峠に入ると、それまでの静かな流れから一変して、各所に滝や淵をつくりて岩の間を流れ下り、山清水路（犀川）へ向かう。

# 遺跡をとりまく環境

## 蛇行する麻績川と遺跡の立地



### 5 遺跡周辺の地形と麻績川

現在、麻績川周辺の低地ばかりでなく、東畠遺跡の立地する台地上も動力ポンプで揚水して水田として利用されている。昭和20～30年頃は桑畑が広がっていた。



### 6 遺跡周辺の地形と麻績川

東畠遺跡から見わたせる、ちょうど同じような台地上から、縄文時代の遺物が採集されている。東畠の東500mにある渕平遺跡からは磨製石斧が出土している。また西500mにある菖蒲田遺跡からは、東畠と同時期の縄文時代中期の土器片が採集されている。隣りあったムラだったのかもしれない。台地は水場に近く水はけが良いため暮らしやすかったのだろう。

## 明治の測量図にみる遺跡

右と思えば左、北と思えば南へと、麻績川の流れは坂北村竹場の中島橋を越えるあたりから、一段と蛇行が激しくなります。

長野自動車道麻績インターチェンジから南西へ4km。ひとつの川であるのに、遺跡までの道中で3つの橋を渡ることでもその蛇行ぶりがよくわかります。

普段は穏やかな水面をみせる麻績川ですが、大小の支流と蛇行する流れのため、ひとたび豪雨となれば大きな被害をもたらします。

昭和34年台風7号の豪雨では、筑北地域一帯に大きな水害をもたらしました。東畑遺跡付近でも低い水田が本流となり、台地の斜面を大きく切り崩しながら、土石流となって差切峠へ向かいました。

役場に保管されていた、今から約120年前、明治18年～21年に行われた現地目調査による測量図（切図）をみると、麻績川は遺跡の手前で東西に大きく蛇行していることがわかります。

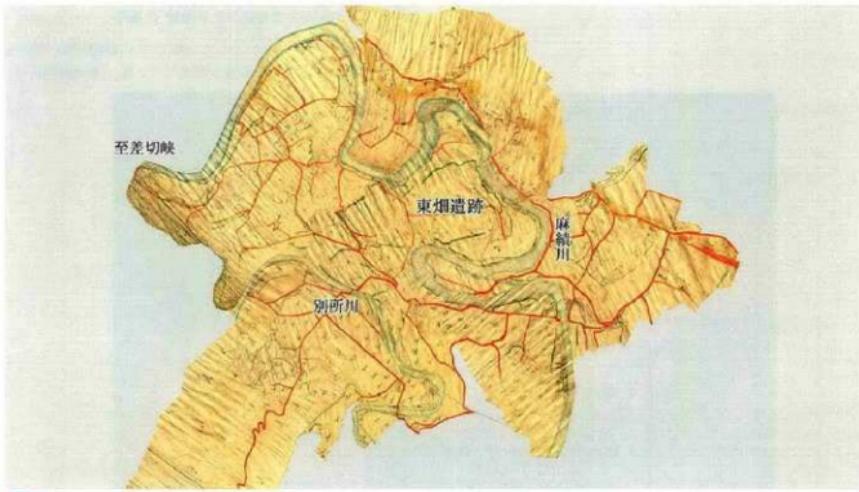
東畑に人々が暮らした縄文時代から四千年。この長い歳月の間に麻績川は台地を削り谷を埋め、機知もその流路を変えながら流れていったことでしょう。

う。縄文時代の東畑の台地は今よりもっと広く、川に面した急な崖は緩やかな傾斜をしていて、川も今より高い位置を流れていたのでしょう。



7 遺跡手前で大きく蛇行する麻績川（南側から撮影）

遺跡手前の土がある部分は現在土捨て場として利用されている。明治の頃にはそこまで川が流れていた。



8 明治20年頃に測量された切図（合成図）

明治18年～21年にかけて行われた現地目調査のためにつくられた測量図。原本の縮尺は600分の1。村役場では地域ごとにづられて保管されている。今回は7枚分の切図を合成した。遺跡のある台地は麻績川によって大きくえぐられて、こぶのように飛び出している。

## 地形と地質

坂北村は今から2,500万年～200万年前、まだ海の底でした。そこで堆積した砂や泥は砾岩<sup>れきがん</sup>や砂岩<sup>さがん</sup>、泥岩<sup>どがん</sup>などの硬い堆積岩となり、その後隆起して陸地となりました。

麻績川沿いの道を行くと、河岸段丘の崖面に幾筋にも重なる地層が観察できます。東畑遺跡の下にみえる地層も「細田砂岩泥岩互層」とよばれる、この堆積層のひとつです。また「青柳の切り通し」として有名な、天正8年(1580年)青柳氏によって開かれた硬い岩も、海底に堆積していた砾岩砂岩層です。

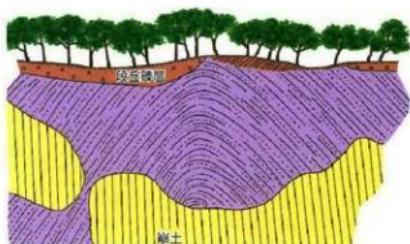
陸地となった後、長い間の浸食作用や火山活動、地殻変動によって次第に谷地形や山々が造られていました。東畑遺跡の台地も古くは川によって削られています。遺跡の調査でもその時に堆積した砂や砂利、丸くなったチャートなどが入る砾層がみつかりました。

その後、麻績川は蛇行を繰り返し、周囲の地形を削り取りながら、東畑のような河岸段丘を形成していきます。麻績川がこのように大きく蛇行する理由は、差切峡に硬い砾岩層が川筋に直交して横たわり、スムーズな水の流れを邪魔しているためと考えられています。



9 遺跡下の地質（左：上部、右：下部）

上部に段丘堆積物の礫層が顔をみせている。その下は砂岩や泥岩が重なりあっていいる。はるか数千万年前、ここが海であつた頃の堆積物である。



10 近くの別所川右岸にみえる褶曲<sup>ひくじょく</sup>の様子

筑北地域には第三紀層<sup>せいさんきそう</sup>が広く分布して、堆積岩類にはいちじるしい褶曲や大規模な断層が発達している。(坂北村誌より)



11 遺跡下を流れる麻績川

川底にも第三紀層の堆積岩がみえる。縄文の人々はこの平らな石を炉石や歌石に利用していた。

## 現在の土地利用と植生

坂北村の森林面積は、2,364 ヘクタールで、村総面積の約80%を占め、約20%は、耕作地・住居地・道路などです。このうち人工林<sup>9</sup>は783ヘクタールで、約33%、アカマツ・カラマツが主で、わずかにスギ・ヒノキがあります。天然林<sup>10</sup>(自然林)は、クリ・コナラ・クヌギなどの雜木林で約57%となっています。

坂北村の最高標高は四阿屋山で1,387m、最低標高は麻績川下流の中込で480m、全村が低山帯(約500 ~ 1,500 m)にはいり、夏緑樹林(温帶落葉広葉樹)が大部分を占めています。標高約1,000 m付近を境にして上部はブナ帯、下部はクリ帯に属しそれぞれ特徴ある植生がみられます。現在の植生は、自然植生<sup>11</sup>と代償植生<sup>12</sup>に分けられます。

森林を中心にみると、自然植生では、原生林<sup>13</sup>のような本来の自然植生はみられませんが、自然植生に近い森林は、ブナ林・サワグルミ林・イヌブナ林・アカマツ林・ケヤキ林・コナラ林などがあげられます。代償植生では、ミズナラ林・アカマツ林・カラマツ林・マダケ林・スギ林があります。(詳しくは村誌さかきたを参照)

ミズナラ林以外は植林された植生ですが、近年は管理の行き届かない状態が増加していて、林内の高木層・亜高木層には、クヌギ・コナラ・クリ・ツノハシバミ・リョウブ・ネジキ・ダンコウバイなどが生育し、林床には幼木もみられます。耕作放棄地や荒地などでは、帰化植物(草本)→スキ草原→アカマツ林→雜木林<sup>14</sup>の遷移が予想されます。現在の耕作地・住居地・道路は縄文時代ではなく、林地・草地・湿地な

どであったと考えられます。

縄文時代の植生が現在の自然植生に近い状態であったと推察すると、クリ・クヌギ・コナラ・カシワのドングリは身近にあり、少し足を延ばせば、今よりも広範囲に分布していたであろう四阿屋山や聖山山麓のミズナラ・ブナ・イヌブナのドングリが手に入り、トノキ・クルミ・ツノハシバミ・ハイイヌガヤなどの木の実も利用できたと考えられます。早春~秋に咲く野生の草花の美しさに感動しながら、ウド・タラノキ・フキ・オケラ・ツリガネニンジン・ショウデなどの林床・林縁・草原などに豊富に生育する山菜を利用し、初夏から秋には、カスミザクラ・ガマズミ・アケビ・マツブサ・サルナシ・ズミ・ヤマボウシ・マタタビ・クサボケ・マメガキ・ナワシロイチゴ・モミジイチゴなどの果実やキノコを味わいながら豊かな食生活をしていたことでしょう。

中村英夫



12 四阿屋山麓のミズナラ林



13 四阿屋山麓の秋  
クヌギ、コナラなどの雜木林(手前)

# 周辺の遺跡

## 谷あいに点在する縄文遺跡



14 犀川右岸の生坂村東部八幡原遺跡の土器

東畑道路と同時期の遺跡で、土器のかたちも似ているものが多い。

15 東部八幡原遺跡の砥石\*

長さ21.0cm。大きな砂岩を砥石に使っている。砥ぎ痕から、石のアクセサリーや骨製品を砥いた道具と考えられる。



筑北の地で最も古い人の足跡（遺跡）は、四阿屋山の山腹、標高900mの高原地形に位置する坂北村の東山にあります（110）。畠地から旧石器時代の安山岩製の石刃が発見されています。1万数千年以上前、まだ土器をもたない彼らは卓越した技術でつくった石器を使って狩猟生活を送っていました。その後、同じような高所を中心にして少しづつ旧石器人の足跡を追うことができます。（90、96）

土器を用いる縄文時代の人々の足跡も、まず聖高原一帯の標高が高い範囲にみつかります（105～107他）。今から1万年ほど前、人々はキャンプ生活をして暮らしていたようです。

その後、今から7,500年前、人々は麻績川に近い、河岸段丘上に安定した集落「ムラ」をつくります。

その代表的なムラ、坂北村向六工遺跡（41）では5軒の竪穴住居跡とともに、底の尖った土器、多種多様な石器が出土していて、山河の幸を得て豊かに暮らしていたことがわかつきました。また遠く和田岬周辺から黒曜石がもたらされていたことも科学的に証明されています。

前期になるとその遺跡数は少しづつ増えて、山腹の高所にある遺跡（9、46、52他）と、川沿いに点在する遺跡があります。

東畑に人々が暮らはじめた前期の終わり、6,000年ほど前になるとムラは川沿いに分布します。同じ頃、犀川流域にも生坂村東部八幡原遺跡（155）などのムラが営まれていきます。

中期になると、さらに遺跡数は増え、麻績川やその支流の各所に規模の大きな集落がつくられていくようです。



16 向六工遺跡

平成1・2年、長野自動車道建設に伴う発掘調査によって縄文時代早期の集落や平安時代、中世の集落がみつかった。土器は先が尖った尖底土器である。



17 東条川左岸の本城村唐前遺跡の土器  
本城村の指定有形文化財。昭和45年の構造改善事業で出土した無傷の埋甕。高さ41.5cm。縄文時代中期後葉の唐草文土器\*である。



18 麻績川右岸の麻績村下井堀遺跡の土器  
高さ12.0cm。縄文時代中期では珍しい蓮形の小さな土器である。唐草文土器である。

本格的な調査はされていませんが、東条川沿いのムラ、唐前遺跡（22）や麻績川沿いのムラ、下井堀遺跡（60）などから当時の貴重な土器がみつかっています。東畑遺跡と同規模の遺跡が眠っている可能性ががらみます。

特に東畑遺跡のある仁熊地区では500mおきに東から諏浦、東畑、菖蒲田遺跡が並び、お互いに協力関係のあったムラ同士だったのかもしれません。

後期になると途端に遺跡は減少します。しかし東畑のように調査をしてはじめて後期の土器や敷石住居跡がみつかる例も多いので、まだまだ遺跡の数や内容は未知数です。本格的な遺跡の分布調査を行えば、筑北における縄文時代の人々の暮らしぶりはもっと明らかになることでしょう。

→巻末 坂北の歴史年表、文化財マップ（折込図）へ  
※本文中の（ ）内の数字は巻末の「筑北地区の遺跡・文化財マップ」に対応しています。遺跡地名表とともにご覧ください。みなさんのお宅の近くにも昔の人たちの足跡が残っていませんか。

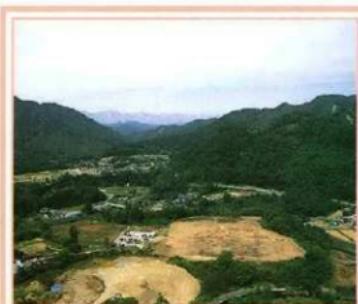
## 第2章

### 集落のくらし



東畠遺跡に生きた縄文時代の人々は、いったいどんな生活をしていたのでしょうか。集落遺跡には当時の人々の生きた証しがたくさん残されています。そこは縄文時代の生活や社会の情報が満ちた場所です。

たくさんの土器や石器といった道具類、また住居跡や穴といった生活の跡から、自然と共生し集落を営んだ先人の姿がみえてきます。また土偶やアクセサリーといった道具からはその豊かな感性、精神性が伝わってきます。今回みつからなかった動植物を利用した道具や、多くの種類の食べ物もたくさんあったことでしょう。



# 遺跡の微地形と基本土層

## 砂質に富む水はけの良い土地

遺跡の標高は561m。現在の麻績川から約13m上った台地上にあります。縄文時代の生活跡は、台地東側の先端付近にみつかりました。このあたりの上は砂質に富んでいるので、とても水はけが良いです。発掘調査の時も、激しい夕立でできた水たまりがあつという間に引いてしまいました。

それに対して、遺跡の西側には生活の痕跡はみつかりません。一見すると同じような平らな場所ですが、地面を掘ってみると、粘土質の土が厚く堆積していて、すぐに水が湧き出でます。地形も少しづつ傾斜して低くなっています。

縄文時代の人々は堅穴住居という半地下式の家に住んでいましたから、水はけがなくて、住みやすい場所を選んでムラをつくっていたのでしょう。

### 坂北村 東畠遺跡基本層序

I層：現在の水田耕作土。全体に鉢輪軸向。下部は茎葉に複数の花茎。根糸や花茎では粘性のある芸苔類土。

II層：田畠地の耕作土。粘性のやや高い暗青褐色土。葉面分離する。

III層：遺跡底層の耕作地。II層の耕作土を含む耕作土。日本米。

IV層：有機物濃度高。20cm以上での土壌肥沃化。II層の耕作土。

V層：V-3層以下の土壤化層。II層の耕作土。

V-1層：V-4層以下の土壤化層。粘性の高い。

V-2層：V-3層以下の土壤化層。中乾燥の粘性。

VI層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

V-4層：V-3層以下の土壌化層。耕作以来から表面に堆積して次第に颗粒を析出していく。水はけが悪く、澱積は存在しない。日本米。

V層：自然堆積層。20cm以上の土壌肥沃化。

VI層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-1層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-2層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-3層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-4層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-5層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-6層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-7層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-8層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-9層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-10層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-11層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-12層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-13層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-14層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-15層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-16層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-17層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-18層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-19層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-20層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-21層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-22層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-23層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-24層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-25層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-26層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-27層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-28層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-29層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-30層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

VI-31層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。

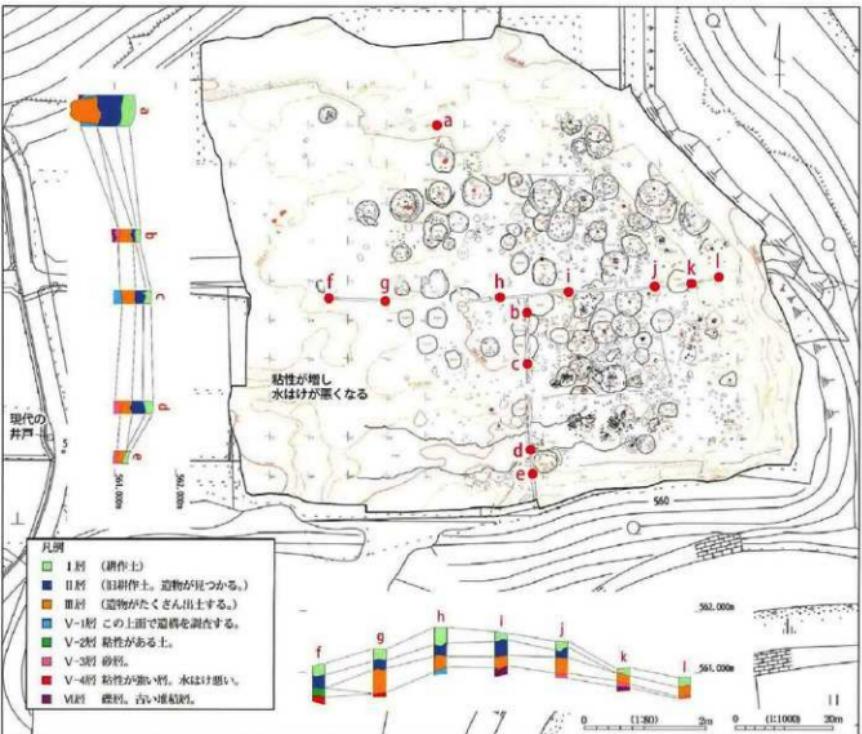
VI-32層：堅穴住居土。堅穴住居土で

は堆積する可能性がある。



19 遺跡に堆積した土

はるか5,000年前といつても、  
東畠遺跡では地表下20~30cmで  
造構がみつかる。



20 微地形と土層の堆積状況

# 縄文時代の足跡を探す

## 調査の進め方と遺構のみつけ方

縄文時代の人たちが遺跡に残した痕跡を「遺構(いこう)」といいます。また出土する土器や石器を「遺物(いぶつ)」とよびます。

発掘調査は地中にある遺構や遺物をみつけて、その情報をできるだけ細かく記録する作業の繰り返しです。

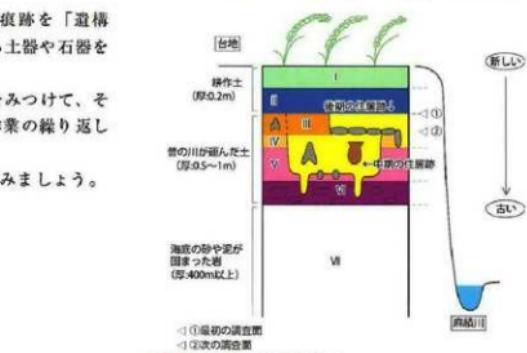
東畠遺跡の調査の段階を写真でみてみましょう。



22 重機による表土剥ぎ  
土器のかけらが出てきたぞ。



23 遺構や遺物をみつける。  
ぼんやり浮かぶ黒い染みは穴の跡だ。



21 東畠遺跡の地層模式図

一般に地層は上にいくほど新しく、下にいくほど古い。遺跡でみつかる遺構も同じことがいえる。



24 丹念に遺構を探す。  
炉の石が出てきたよ。



25 平らな石はなんだろう。  
田んぼの土のすぐ下に並んでる。



26 土器が埋まっていた。  
縄文の人々が埋めた土器を掘り出す。



31 記録をする。  
みつかった状態をていねいに記録する。



26 どこまで石はあるかな。  
平原に削っていくと、石の集まりがわかる。



29 火を焚いた跡。  
近くでとれる砂岩を組んで炉にしていたんだ。



28 敷石住居っていうんだ。  
鍵穴のような形に石を並べた家の跡だったんだ。



27 土をはがしていく。  
縄文人ととの対話の瞬間。

# みつかった足跡とその性格

## 当時の人々が掘った穴の数々

調査を進めていくと、大小の穴がたくさんみつかりました。この大地を掘りくぼめた穴の数々こそが、縄文時代の人々が暮らした足跡（遺構）です。

穴には大きくて底が平らなものや、細く深い形、また石を敷き詰めてある例もあります。その形状や規模、穴を埋めていた土に含まれる遺物などから、半地下式の住居、柱を組んだ建物やお墓と考えられる穴や食べ物などを貯めておいた穴などに分類が可能です。

分類した穴を細かく観察すると東烟ムラの暮らしぶりがみえできます。ここではその特徴を種類ごとに紹介します。

### 32 穴の数々（記号・SB、SH）

おむね3~6m位の円形や楕円形で、底が平らな穴は、当時の住居跡です。平らな底の部分が床にあたります。床の真ん中あたりには煮炊きをしたが

遺構の種類	数	内 容	記 号
住居跡	120	竪穴住居跡、敷石住居跡など	SB、SH
建物跡	1	掘立柱建物跡	ST
穴（土坑）	740	お墓や貯蔵穴、大小の穴	SK
その他	4	単独で出土した土器など	SX

### 33 竪穴住居跡

調査では住居跡をSB、建物跡をST、穴をSKといった記号と登録番号で管理する。

があって、周りには柱を建てた穴がみつかります。東烟遺跡では120軒もの竪穴住居跡がみつかりました。住居跡を埋めている土から土器や石器もたくさん出土します。当時は住居は生活の中心ですから、ここには縄文時代の人たちの生きた情報が残されています。その情報を逃さないように調査をしていきます。



33 竪穴住居跡

丸く半地下に掘りくぼめた住居跡。壁の近くにある穴に柱を建てていた。



34 竪穴住居跡

東烟遺跡では重なり合ってみつかることが多い。



35 火を焚いた跡

石で組んだ炉。麻績川から拾った石を使っている。



36 石で組んだ炉

砂岩の大きな石を四角に組んでいる。深さ39cm。大きな炉である。

### 敷石住居跡（記号・・・SB、SH）

竪穴住居の床に平らに石を敷き詰めている例があります。東畠遺跡でも8軒みつかりました。これを敷石住居とよびます。縄文時代中期の終わりから後期中葉に中部地方から関東地方西部を中心に流行した住居の種類です。当時、東畠にも同じ文化をも



37 敷石住居跡（縄文時代後期初頭）

平らな砂岩や火山岩をきれいに並べている。



39 敷石住居跡（縄文時代後期前葉）

石がない部分もある。柄鏡形をしている。この住居の下から縄文時代中期の住居（SB060）がみつかった。

った人たちが暮らしていました。麻績川周辺に多く分布する砂岩や泥岩ばかりではなく、角張った硬い火山岩も運んできています。それらを上手に組み合わせて床に敷き詰めています。なぜ石を敷いたのか、縄文時代の人々の考え方や目的はまだわかっていない。



38 炉の跡

四角い炉である。炉石もよく焼けている。



40 炉の跡

麻績川の石を丸く並べている。みえている土器は炉の一部として二次利用している。



### はしだてほしらたてものあと 掘立柱建物跡 (ST)

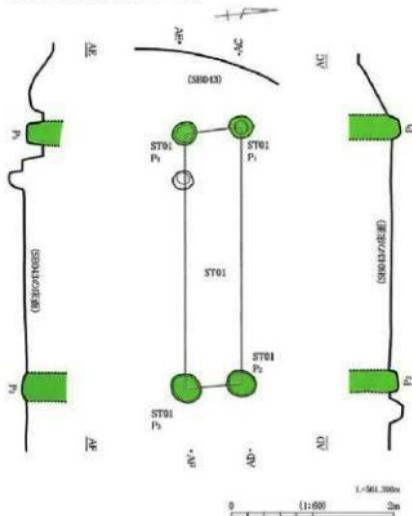
住居の柱を建てた柱穴とよく似た穴があります。この柱穴が長方形に一定間隔で並んでいる場合、そこにはそれぞれの柱を組んで、高床や地面を床にした建物があったと考えられています。どんな上屋を支えていたのでしょうか。



41 建物の跡

ピンが立っている穴に柱を4本建てていた。縄文時代中期の住居の上に重なっている。

### ST001 建物跡実測図 (1:60)



ST001 建物跡は古い住居 (SB043) が埋まった後に建てられている。

### 土坑 (SK)



42 大きな穴

深さも大きさも1mほどもある穴。貯蔵穴だろうか。



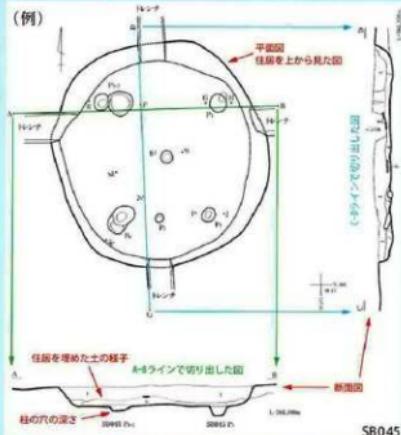
43 石が投げ込まれた穴

石皿や石を投げ込んでいる。右にあるのは磨製石斧。

小さな穴(堅穴)の総称が土坑です。東畑では740個も発見されました。形も大きさもさまざまですから、用途もお墓であったり、貯蔵穴であったり、建物の柱穴であったりと多種多様だったことでしょう。

## 実測図面の見方

遺構に残された情報を図化することで、調査に立ち会えなかった人もその情報を共有できます。遺物の実測図も写真ではわからない情報を盛り込みます。



44 遺構の図面

掘り出した状態を細かく図面に表す。竪穴住居などの大きさや形、深さ、埋まっている状態を記録する。

## 縄文時代とは・・・

長い氷河時代が終わると、世界各地で土器などの新しい道具がつくられるようになりました。

今から15,000年から13,000年前、気候が暖かくなって、海平面が上昇してきたため、これまで陸地の一部であったところが島となって、現在のような日本列島ができました。周囲の自然環境や動物、植物の種類も変わりました。それとともに人類の新しい生活が始まりました。

そのころ、日本列島の人々がつくった土器の表面には縄目のような模様がついているものが多いので、その土器を縄文土器とよんでいます。ただ東畠遺跡のように棒や竹管、粘土紐で模様をつける例も多くあります。(40~43<sup>2</sup> 参照)

また木の実や、小形のけものや鳥、魚や貝などに恵まれていたので、人々は採集や狩りや漁によって多くの食べ物を得ていました。そしてムラをつくり、竪穴住居に住んでいました。このように自然と共に共生し、縄文土器を用いていたころの文化を縄文文化、その時代を縄文時代とよんでいます。

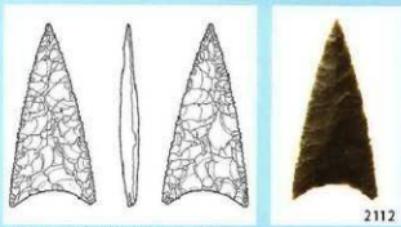
今のところ国内で最も古い土器の年代は、約15,000年前であるという研究成果が発表されています。また米づくりが行われる弥生時代は2,800年前にはじまるといわれていますから、縄文時代は12,000年前も続いたということになります。(66<sup>2</sup> 参照)

この縄文時代の人々が日本人の原型と考えられ、その後、大陸から移り住む人々と混じりあって、長い年月の間に、共通の言葉や文化をもつ日本人ができるましたと考えられています。



45 土器の実測図 (S=1:8)

土器を横から見た状態。右側にあるのは断面図。土器の形状や模様を丹念に記録する。



46 石器の実測図 (S=1:1)

小さな矢じりも、よくみると繰り返していることがわかる。先人の密密に挑戦することなく、ていねいに觀察する。



# 縄文時代前期の住居

## はじめて暮らした人々

調査の結果、東烟遺跡に人々がはじめて住居をつくりはじめたのは、今から約6,000年前、縄文時代前期後葉であることがわかりました。

住居の時期は、竪穴住居跡から出土する土器の形の変化から判断します。(66・67頁参照)

未開の林を切り開いてきたのでしょうか。そのころの人々は台地の内側（北西寄り）に寄り添うように住居を建て、ムラをつくっています。

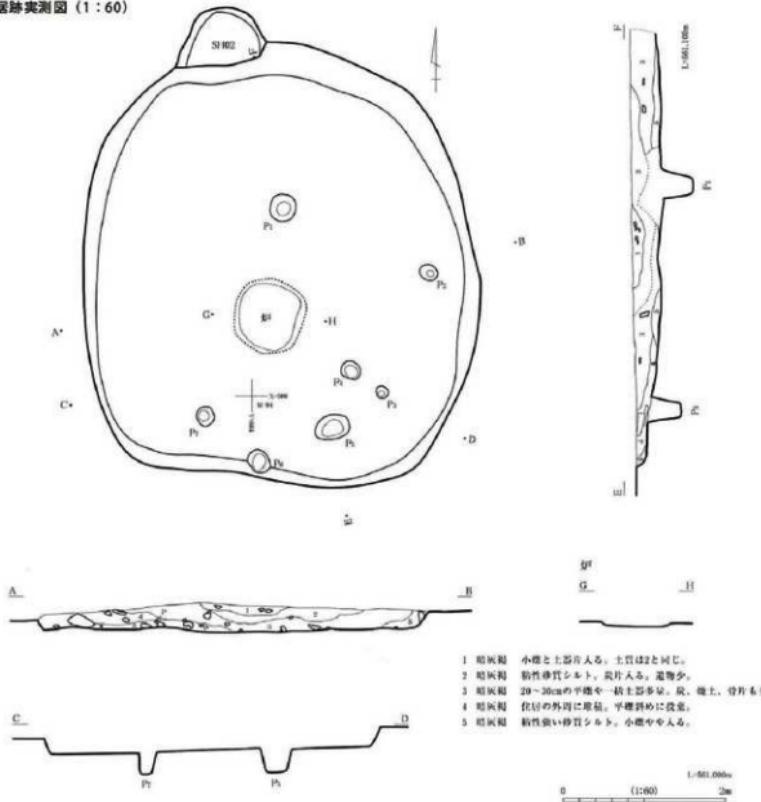
そのひとつ、SB053住居跡をみてみると、形は梢円形をしていて、壁はほぼ垂直です。床の南寄りにある炉は少し地面を掘りくぼめただけの「地床炉」

です。その部分が火を受けて少しだけ焼けていました。

上屋を支える柱の穴は3ヶ所みつかっていて、炉を3角形に囲んでいます(P15.7)。どれも深さ30cmほどで細く深いのが特徴です。

また住居を覆う土から、たくさんの土器片や石器が出土しました。そのうち、復元された土器(P0544)は底部がない状態で高さ45.7cmもあって、この時期にはあまり例がない大きさです。多くの食べ物を貯めていたのかもしれません。

SB053 住居跡実測図 (1:60)



## データ

住居番号: SB053

調査: 記録保存

位置: 調査区の中央、台地の内側

かたち: 楼円形

大きさ: 縦5.36×横4.84m

壁の様子: ほぼ直立

床の様子: 地面をならしている。

炉: 地床炉

ピット数: 7

主な柱穴: P15, 7

出土土器: 26,548g

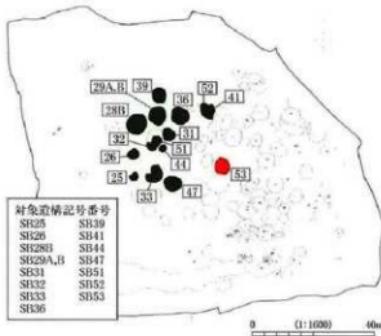
石器: 8,175g

骨片: 31.1g

住居が使われていた時期: 繩文時代前期後葉I (古)

(根据: 住居の形や出土した土器から)

## この住居の位置(縄文時代前期後葉I)



47 遺物の出土状況

おびただしい数の土器や石器、石が出土した。



49 出土した土器

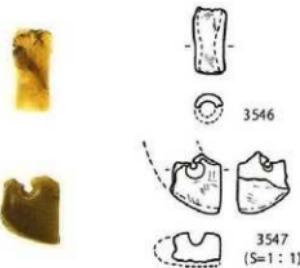
石匙や磨製石斧がめだつ。右下(3323)は長さ17.3cm。



P544

48 復元された土器

高さ45.7cmもある大きな土器。器厚は5mmほどと薄い。



50 アクセサリ類

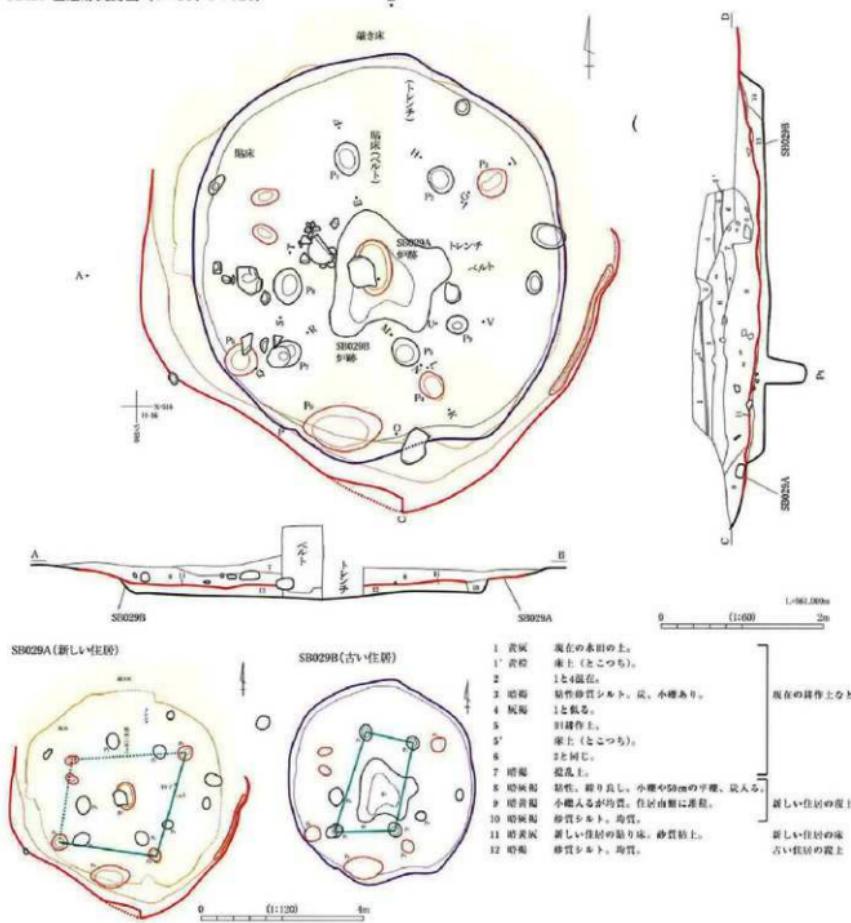
上: 滑石製の管玉(長さ1.4cm)。

下: 滑石の玦状耳飾(長さ1.7cm)。よく磨かれている。

## 建て替えられた住居

SB029住居跡のトレンチ調査をしていると、トレンチの壁に薄くて堅くしまった平らな層(下図:11層)がみつかりました。さらにその下には地面を平らにした床が出てきました。まず堅い11層上を掘り広げると、凹凸はあるものの、平らな面が出てきます。また真ん中には炉もみつかりました。そして下にはもう1軒、地面を床にした住居がみつかりました。

SB029 住居跡査測図 (1:69, 1:120)



た。どうやら一度埋めた住居の土に床を貼って、暮らしていなようです。

出土した土器を比べてみると、新しい住居(SB029A)も古い家(SB029B)も同じ種類で、時期差はありません。このように同心円状に住居を建て替えることが縄文時代にはあったようです。

## データ

住居番号: SB029A・B 調査: 記録保存

位 置: 調査区の北寄り、SB028の東隣。

SB029A（上にある新しい住居）

かた ち: 楕円形？

大 き さ: 幅(6.00)×よこ5.80m

壁: 不明 床: 古い住居の覆土に床土を貼る。

炉: 地床炉

主な柱穴: 4個

覆 土: 小さな石や50cmもある大きな石が入る。

SB029B（下にある古い住居）

かた ち: 楕円形

大 き さ: 幅4.60×よこ4.52m

壁: 直立 床: 地面をならしている。炉: 地床炉

柱 穴: 4個 覆 土: 均質な砂質土。

土器(A・B): 3,650g 石器: 1,741g 骨 片: なし

住居が使われていた時期: 縄文時代前期後葉I(新・古)

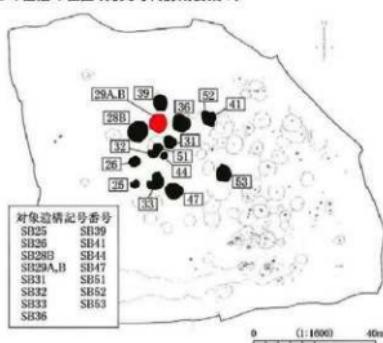
(根拠: 住居の形や出土した土器から)



51 堆積の状況

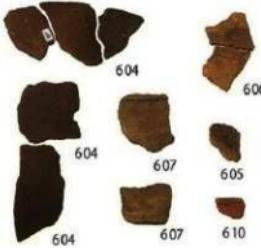
下の家を埋めた土に床を貼っている。

## この住居の位置(縄文時代前期後葉I)



52 上の住居の状況

部分的に貼った床をみつけた。大きな石も出土している。



53 出土した土器

土器はかけらが多い。上下の家で土器の時期差はない。

右上 (606) は幅10.8cm。



54 出土した石器

3545は大型の磨製石斧(長さ14.1cm)。木を切り倒す道具である。

### 同じ場所に重なる住居

SB028住居跡もほぼ同心円状に2軒の住居が重なっていました。上の住居の床層（貼り床<sup>8</sup>）は、とても薄く不安定だったので、「もしかしたら床ではないのかな？」と少々自負なく調査を進めました。

しかしその床面に小さな石岡炉がみつかって、間違いない住居跡であることがわかりました。

次に下の住居跡を掘り広げると、床に地床炉がみつかりました。また柱の配置も上の住居は6本柱、

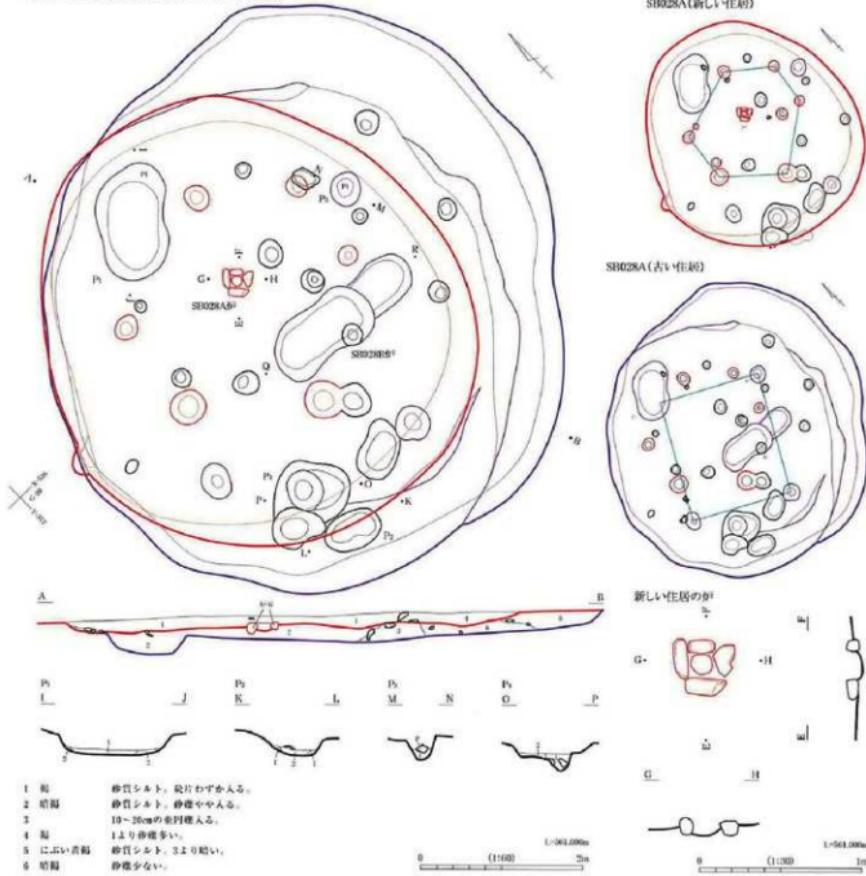
下の住居は4本柱と違いがあることがわかりました。

下の住居の時期は、住居の特徴と土器から前期後葉であることがわかりました。

上の住居は覆土が薄く、ほとんど土器が出土していませんが、石岡炉と6本柱の配置という特徴を他の住居と比べてみると、中期中葉にあてはまる可能性が高くなりました。

東畠のように、長く続いたムラでは同じ場所に数百年後に再び住居が建てられることがあります。

### SB028 住居跡実測図 (1:60、1:120)



## データ

住居番号: SB028A・B 調査: 記録保存。

位 直: 調査区の北寄り、SB029の西隣。

SB028A（上にある新しい住居）

かたち: ほぼ円形

大きさ: 縦(5.44)×横(5.40)m

壁: ゆるい傾斜

床: 古い住居の櫻土に床土を貼る。炉: 石圓炉

主な柱穴: 6個

覆 土: 砂質のシルトで炭片が入る。

時期: 繩文時代中期中葉Ⅲ～Ⅳ

SB028B（下にある古い住居）

かたち: ほぼ円形 大きさ: 縦(7.20)×横(6.40)m

壁: ゆるい傾斜 床: 地面をならしている。

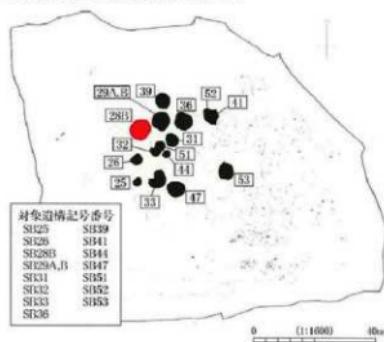
炉: 地床炉 柱穴: 4個 覆 土: 部分的に石が混じる。

土器(A・B): 5,206g 石 器: 8,735g 骨 片: なし

住居が使われていた時期: 繩文時代前期後葉I(新・古)

(根拠: 住居の形や出土した土器から)

## この住居の位置(縄文時代前期後葉I)



55 上の住居の状況

石圓炉とわずかに貼り床が残っている。



56 上の住居の状況

小さな石で組んだ炉。麻績川の石だろう。



57 下の住居の状況

炉はわずかに地面を掘りくぼめただけである。



58 出土した土器

下の住居の土器。縄文時代前期後葉の土器のかけらである。  
右上(625)は縦8.5cm。

# 縄文時代中期の住居

## 炉に土器を使う

東畠遺跡に縄文時代の人々が暮らした1500年間に  
は、住居の形ばかりではなく、炉の形も変わってい  
きます。前期までは地床炉がほとんどでしたが、中  
期になると炉に土器を再利用しています。

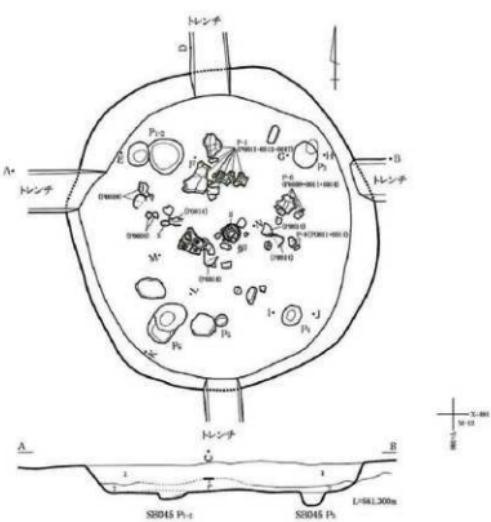
煮炊きに使っていた土器の胴部をきれいに削って  
住居の床の真ん中に埋めます。このような炉を「埋  
甌炉」とよびます。よくみると土器の縁が火を受け

て変色したり、剥がれていますが、それほど強い火を受けている痕跡はありません。

埋められた土器には、圓炉裏のように灰が入れられ  
て、その上でおきびが赤く燃えていたのでしょうか。

埋甌炉は次第に石圓炉へ、つぎに石組炉へと移り  
変わっていきます。

SB045 住居跡実測図 (1:30, 1:60, 1:120)



**データ**

住居番号：SB045 調査記録保存・盛土保存位置：調査区の中央。やや南寄り。  
かたち：楕円形 大きさ：縦3.94×横3.78m  
壁の様子：直立気味 床の様子：全体に平らで堅い。

炉：埋葬炉 柱穴：4個  
入口部：小さな穴がある。様子をかけた穴か？  
覆土：上～中層に土器片や石片、骨片が多量に入る。

炉のすぐ上から底の抜けた深鉢出土。

土器：27.576g  
石器：3030g 骨片：373.2g

住居が使われていた時期：縄文時代中期

中葉！

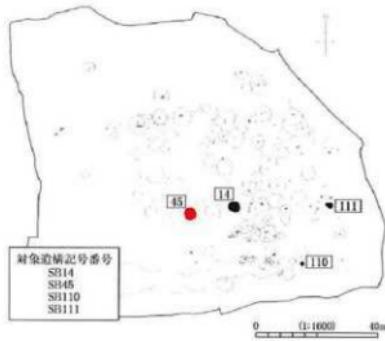
(根拠：住居の形や出土した土器から)

主な遺物：北陸地方の影響を強く受けている土器がまとめて出土している。



62 土器の出土状況

床より少し高いところから土器がまとめて出土した。

**この住居の位置（縄文時代中期中葉Ⅰ）**

63 住居跡の実掘状況

こじんまりとした住居。4本の細くて深い柱穴がある。



64 出土した動物の骨

住居を埋める土からは動物の焼けた骨片が出土した。



65 深鉢形土器

これも北陸地方の影響を受けた土器である。  
高さ22.5cm。



66 浅鉢形土器

食べ物を盛り付けた土器。口縁部に細かな模様がある。  
高さ13.7cm。



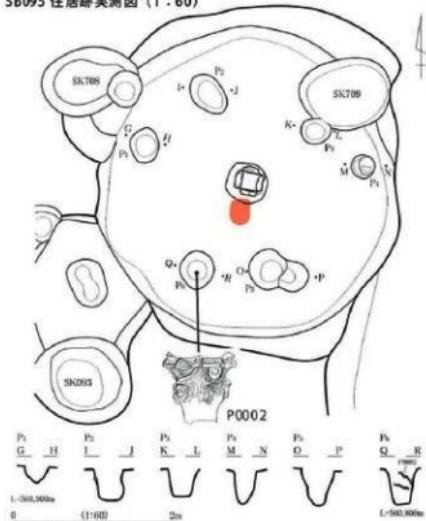
67 出土した石器

小形の石鏃 (1148ほか) や磨製石斧 (1151、長さ19.3cm)、打製石斧 (1169) など石器も豊富である。

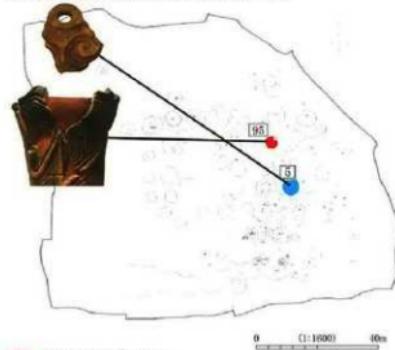
## ひとつの住居、その始まりから終わり

地面を掘って住居をつくり、生活する。住居を離れるとき、柱を抜いて解体する。柱の穴には、今まで煮炊きに使っていた土器を納める。床や炉が土に埋もれる頃、土器や石器、石を放り込む。調査からわかる、住居に関わる人々の行動。そこには夜露をしのぐだけの場所ではない、住居の存在がみえてくる。

SB005 住居跡実測図 (1:60)



この住居の位置 (縄文時代中期中葉IV～V)



71 造構間接合<sup>※</sup>の状況

少し離れたSB005住居から出土した人体文のかけらが接合した。



68 石窯

小形の川原石を四角く組んでいる。



69 遺物の出土状況

足の踏み場もないくらい土器や石が出土した。



P020

70 再会した土器

人体文だけが別の住居から出土した。偶然なのか。何か意味があるのだろうか。高さ29.2cm。



72 出土した土器

さまざまな模様や形の土器がまとめて出土した。中央上の土器は高さ24.8cm。



73 家族のだんらん



74 柱穴を探す

床面をきれいにして柱穴の跡を探す。真ん中が炉。



75 柱穴の調査

入口に近いピット6を半分に掘ると、完全な形の土器が額を出した。



76 家の解体（柱を抜く）



78 土器の出土状態（ピット6）

完全な形ではなく、底だけが抜かれていた。



77 柱穴に土器を納める

どんな思いがあるのだろうか。



79 家を覆う土と遺物の状態

住居が埋まっていく途中で、石や土器が棄てられたようである。



80 廃屋へ土器を投げ込む

完全な形の土器もかけらも、大きな石も一緒に投げ込んでいる。

## 住居の床に土器を埋める

前期後葉の頃、人々は屋外の穴に底を抜いた土器を埋めています(34°)。中期中葉になると、住居内に炉として土器を埋めるようになります(26°)。

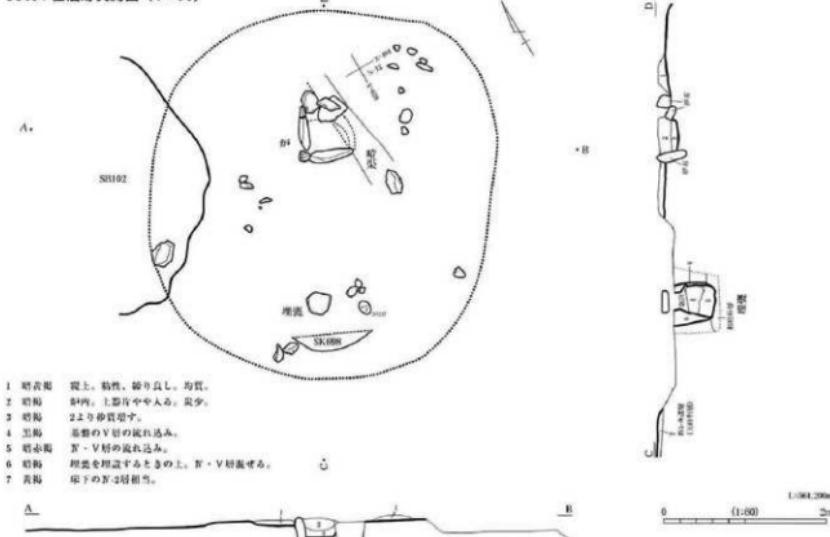
炉が石圓炉に変わる頃、人々は柱を抜いた穴に底を抜いた土器を埋めたり、入口近くの床に土器を埋めたりするようになります(28・29・72°)。

中期後葉になると、住居入口部の床に大きな土器を埋めるようになります。これを「埋甕」とよびます。底が割り取られた、ひとつかえもある土器をま

っすぐ埋める例や少し斜めに埋めたりすることがあります。また、逆さまに埋める例、二つの土器を重ねて逆さまに埋める例もみられます。

埋甕の目的は明らかになっていません。しかし、水を入れて煮炊きに使った土器の底を抜き、その機能を停止させてから、わざわざ穴を掘って、壊れないように埋めるという行動の背景には、当時の精神的な考えが深く関わっていたと考えてよいでしょう。

SB004 住居跡実測図 (1:60)



81 炉と埋甕

炉の南側に埋甕がある。住居の入口にあたる。

### データ

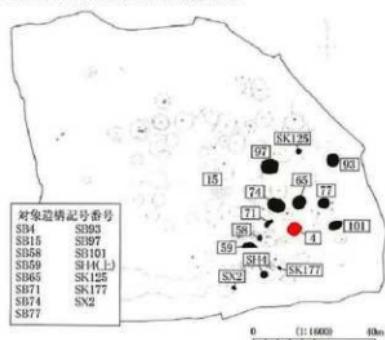
住居番号：SB004 調査：記録保存  
位 置：調査区の東側。麻績川寄り。  
かたち：不明。大きさ：縦(4.80)×横(4.80)m  
検出：炉石と埋甕を検出。住居の掘り込みは後世の耕作で、削られている。  
床：不明。炉：石組炉  
柱 穴：不明 入口部：石蓋をした土器を重ねた埋甕あり。  
埋甕内の上部は空洞。下部の土も埋設後の流れ込みと考えられる。  
覆 土：薄く不明瞭。  
土 器：11,591g 石 器：3,682g 骨 片：1.0g  
住居が使われていた時期：縄文時代中期後葉IV（古）  
(根拠：埋甕の時期から)



82 墓壙の上の石蓋

平らな川原石がみつかった。

この住居の位置(縄文時代中期後葉IV)



83 石蓋を取り除いた状態

ぱっかりと土器が顔を出した。4,000年間空洞だった。



84 墓壙の状況

石蓋の下にひっくり返した土器を二つ重ねていた。



85 墓壙の取り上げ

土器を壊さないように慎重な作業が続く。



86 墓壙と石蓋

左の土器は岸川流域の土器。高さ35.5cm。右の土器は千曲川流域の土器。

# 縄文時代後期の住居

## 石を並べた住居

後期になると、人々は住居の床に平らな石を敷き詰めます。この敷石住居跡は10軒みつかりました。東畑では耕作土のすぐ下に敷石が出土しますが、もともとは竪穴住居の床に石を敷いています。

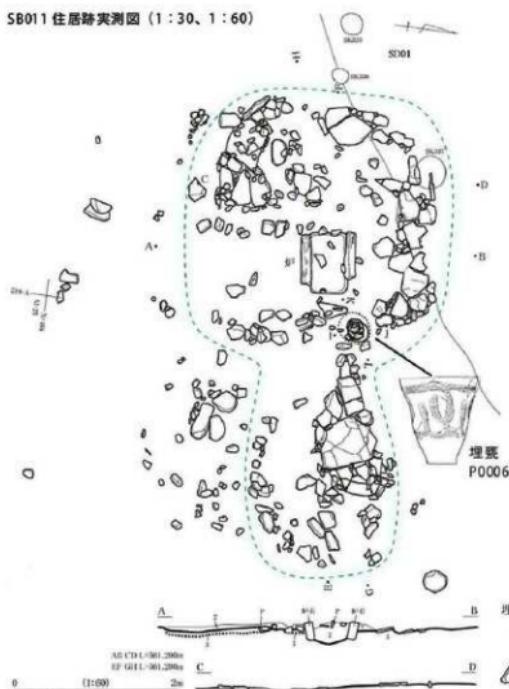
石の並び方は柄鏡のような形をしています。柄の部分が入口にあたり、鏡の部分が住居空間にあたります。

SB011住居跡実測図(1:30, 1:60)

SB011住居跡では入口部と石組炉の間に埋甕がみつかりました。炉には麻績川沿いにみられる砂岩が使われていますが、角ばってすべすべした安山岩の平石も使われています。どこから運んできたのでしょうか。

敷石住居はそれまでの竪穴住居と異質な感じですが、基本的には普段暮らす生活空間だったようです。

SB011 住居跡実測図 (1:30, 1:60)



89 埋甕

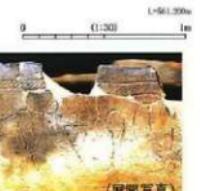
アルファベットの「J」のような模様が連続している。



88 埋甕に入れられた石器  
どちらもつくりかけの矢じりである。  
(上: チャート製、下: 貝岩製)



1 埋甕  
現代水田の東側。後石古上。  
粘性土。緑色丸土。均質。  
壁、底や有り。  
2 砂岩  
河原より採集。  
3 砂岩  
均質  
4 均質  
粘性のあるシート。埋甕を  
埋成するときの上。



## データ

住居番号: SB011 調査:記録保存

位 置: 調査区の東側、麻績川寄り。

かたち: 柄焼形。

大きさ: 縦(5.92)×横(3.68)m

検出: 炉石と散石を検出。掘り込みは後世の耕作で、削られている。炉:石組炉 柱穴:不明

埋 留: 入口部と主体部の連結部にあり。斜位。内部から石鏡2点出土。覆土:薄く不明瞭。

土 器: 18,478g 石 器: 8,013g 骨 片: 4.6g

住居が使われていた時期: 織文時代後期初頭  
(根拠: 墓葬の時期から)



90 散石の検出状況

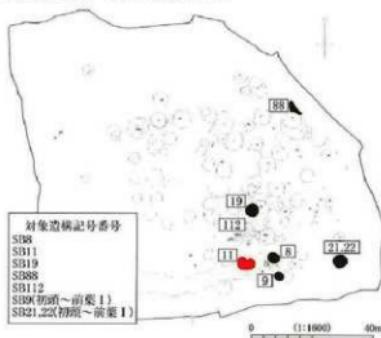
入口が大きく張り出しているのが特徴である。



92 住居の様子

真ん中に砂岩でつくった炉がある。手前に埋甌がみえる。

## この住居の位置 (織文時代後期初頭)



91 散石の石材

平らな砂岩や火山岩などをていねいに並べている。



P259

93 小形の土器

高さ11.0cm。小さいが丹精につくられている。

# さまざまなもの（土坑）

豊穴住居とともに、縄文時代の人々が定住している証拠に、マラの中に掘られた多くの穴があります。また豊穴住居も広い意味では、大きな穴です。

大小さまざまな穴すべての用途を解明することは大変難しいことです。出土する土器も少ないため、それが掘られた時期もとらえにくいのが現状です。

調査ではそれぞれの穴の堆積状況を観察し、形を実測したり、写真に収めたりしています。

ここでは底のない土器が出土した、とても特徴的な穴を紹介します。貯蔵を目的にした可能性が高いSK021とは、違う目的があったのではないかでしょうか。



94 大きくて深い穴 (SK021)

深さ80cm。大きな石や土器片が出土した。  
(縄文時代前期後葉)



95 鉢が出土した穴 (SK178)

底がない鉢形土器がひっくり返しに出土した。  
(縄文時代前期後葉)

P536



96 深鉢が出土した穴 (SK177)

この穴は楕円形の穴になった。(縄文時代中期後葉)

P539



97 穴の調査 (SK069)

穴の真ん中に土器が横たわっている。



98 SK069の土器

この土器も底がない。(縄文時代前期後葉)

P577

## 当時のお墓がみつかった

田んぼの土を取り除いていると、大きな土器がみつかりました。最初は埋葬かと思いましたが、よくみるとひっくり返しに埋められた鉢形土器でした。底部は田んぼの造成で壊されていました。

調査を進めると土器は、長さ1.32m程の楕円形をした穴に入れられていることがわかりました。

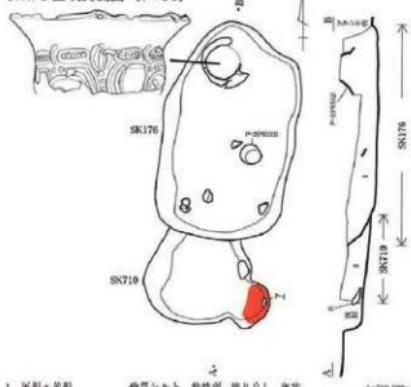
この鉢形土器が使われていた後期前葉には、亡くなつた人をお墓に埋葬する際、顔に土器を被せる風習があったことがわかっています。東畠ムラの例もそのようなお葬式の一例なのでしょう。明科町北村遺跡では当時の墓地がみつかっています。お墓をつくる行為は、当時の人々の精神性の高さを示しています。



100 SK176の完掘状態

鉢形土器の底部は耕作で削られていた。当時は完形であっただろう。

SK176 土坑実測図 (1:30)

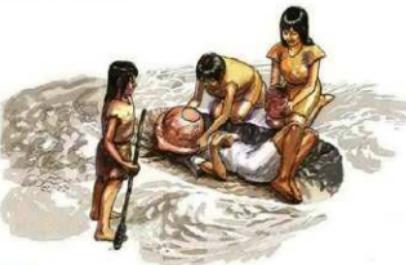


102 SK176と出土土器実測図



99 出土した土器

左は鉢形土器（逆さまのまま）。右は小形の深鉢形土器である。右高さ11.9cm。



101 葬送の様子

横たえた遺体の顔に土器を被せ、足元に小さな土器を手向けた。



103 明科町北村遺跡の埋葬人骨 (SH1215)

膝を折り曲げて手を組んでいる。顔には鉢をかぶされて葬られている。比較的若い男性と同定されている。(縄文時代後期)

# 「縄文土器」という道具

## たくさんみつかった土器

縄文時代の最も代表的な遺物は土器です。東畠遺跡では1,310,507g（約1.3t）も出土しました。

その大半は煮炊きに使用されていた深鉢形土器です。用途は「お鍋」と同じでも、その表面に施された模様は複雑であり、とても繊細です。

その模様や形は、時代ごと、地域ごとに変化していますので、縄文時代を探る時の物差しとして、重要な役割を果たしてくれます。



105 土器の出土状態

たくさんの土器と一緒に出土した。  
SB061出土。（縄文時代中期中葉）



106 土器の接合作業

扇形に土器を並べてみる。底以外はすべてみつかった。



104 焼成粘土塊

土器をつくったときの粘土か。焼かれている。左長さ74cm。

P134



107 復元された土器

胴部に大胆な模様がついた深鉢形土器。高さ28.8cm。

P083



108 縄文時代中期中葉の土器

鍋に使われた深鉢以外にも大小さまざまな土器がつくられている。右上高さ67.2cm。

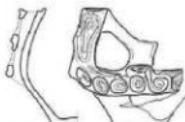
## いろいろな形の土器



109 釣手形土器

深い跡に釣手をついている。内外面がすすぐれている。灯りをともした土器。高さ19.3cm。(縄文時代中期後葉)

P378



110 釣手形土器実測図

P378  
(S=1:8)

111 浅鉢形土器

口の周りに粘土紐で模様を廻らせている。高さ12.5cm。(縄文時代中期中葉)

P561



112 台付土器

小ぶりな土器である。高さ9.0cm。

P316



113 台付土器実測図

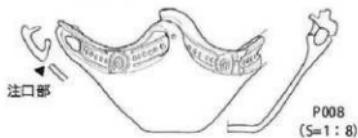
台には○と◇の透かし孔が1対ずつ開いている。

(S=1:8)



114 鉢形土器

上からみると四角で底部は円形。四方の把手が大きく張り出している。胸部の一箇所に穴が開けられている。何かを注いだのだろうか。(縄文時代後期前葉)



115 鉢形土器実測図

左側の把手の下に穴があけられている。高さ20.0cm。(縄文時代後期前葉)

P008  
(S=1:8)

116 注口土器実測図

P286

P571

(S=1:8)



117 注口土器

まるで急須のような形をしている。大きさもさまざま。中央上は高さ11.0cm。(縄文時代後期前葉)

## 縄文のお鍋、深鉢形土器



P005

118 前期後葉の土器

朝顔のように大きく開く器形。口縁には丸いボタン状の粘土が貼り付けてある。高さ33.1cm。



P041

119 中期初頭の土器

シンプルな形をしている。棒状の工具で向本も線を描いている。高さ24.0cm。



P048

120 中期中葉の土器  
口縁の模様は蛇に良く似ている。  
高さ14.6cm。



P076

121 中期中葉の土器

寸胴な縦文を施した土器。高さ34.8cm。



P070

122 中期中葉の土器

肩部全体にさまざまな模様を組み合わせている。高さ19.4cm。



P019

123 中期中葉の土器

激しい川の流れのような模様。千曲川の上流に多い土器である。高さ24.8cm。



P236

124 中期中葉の土器

口縁部が緩やかに膨らんでいる。乳房状突起とよばれる。高さ43.5cm。



P458

125 中期後葉の土器

大きな把手が4つ付くのが特徴である。高さ29.4cm。



P434

126 中期後葉の土器

肩が張ったスタイル。粘土紐に刻みを入れたり、器面にウロコのように連続した模様を描く。高さ43.6cm。



P457

127 中期後葉の土器

バケツのように寸胴なスタイル。口辺部の渦巻きが特徴。犀川流域の土器。高さ35.0cm。

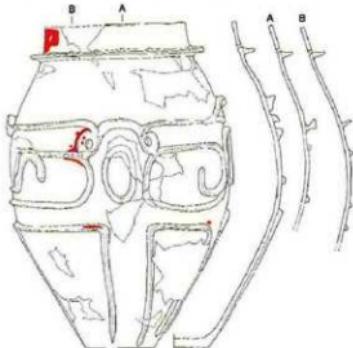
## 有孔鈎付土器って何だろう

バラバラに割れて、139個に分かれていた土器片が、高さ67.2cmもある土器に復元されました。有孔鈎付土器とよばれるこの土器は、平らな口縁の下に一層する鈎状の帯に沿って、多数の小孔があけられていて、内外面は赤く塗られていきました。また外面には円文が描かれ、肩部には人の顔のような不思議な模様があります。これまでに太鼓説、お酒つくりの壺説と、その用途には諸説あります。しかしそまだ謎だらけの土器です。



129 出土状況 (SB061住居跡)

たくさんの土器と一緒に割れて出土した。



133 出土状況 (S=1:10)

赤い部分に赤色塗彩が残っていた。



134 展開写真

粘土紐を巧みに使って模様を連続させている。



128 全体写真

底部は比較的小さい。肩部中央に顔のような模様がある。  
P069 高さ67.2cm。



130 円文の状況

描かれた円文が浮かび上がってきた。



131 赤色塗彩 (外部)

赤の原料はベンガラだろうか。鮮やかである。



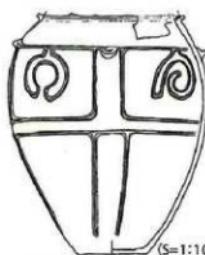
132 赤色塗彩 (内部)

この一片だけが赤かった。洗い落ちているが内部にも色を塗っていたのだろう。



135 付着物のある土器

同じ住居から出土。内面底にウルシのような黒色の付着物がある。高さ12.7cm。  
P075



136 長野市植田遺跡の土器

とてもよく似ている。穴に埋められて出土した。

## 連続する模様



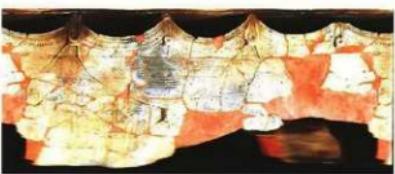
137 中期中葉の土器 (SB045出土)



P012



138 中期中葉の土器 (SB045出土)



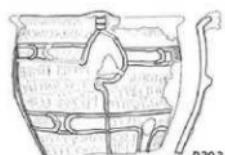
P009



139 中期中葉の土器 (SB045出土)



P012



P303

140 中期中葉の土器 (SB012出土)

肩部に指おさえの痕をあてて残す。粘土紐が縦横に連結する。千曲川流域の土器と考えられる。高さ26.8cm。



P020

141 中期中葉の土器 (SB005・095出土)

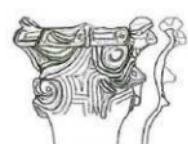
人の後ろ姿を土器に付けていた。環状の突起が頭部にある。あたかも土器を抱えているかのようだ。高さ29.2cm。

## 土器を横に開いてみる



142 中期中葉の土器（S8095出土）

凹凸の線を巧みに組み合わせて曲線を描く。よくみると同じ模様が2回繰り返される。計算された構成。焼町土器とよばれる。高さ19.9cm。



143 中期中葉の土器（S8095出土）

S8095の穴に埋められていた土器。「S」字状の曲隆線を中心として、大きく模様を展開する。焼町土器。高さ32.6cm。



144 中期中葉の土器（S8065出土）

まるで人のような、「X」字形の把手が付く。これも焼町土器の仲間である。高さ11.7cm。



145 中期後葉の土器（S8004埋甌）

口縁部が関東地方、胴部の大きな渦巻きが東北地方の土器に似ている。口縁部は4回、胴部は3回模様を繰り返す。高さ26.4cm。



146 中期後葉の土器（S8011埋甌）

胴部に「」字文が4回繰り返されている。模文を磨り消してコントラストを付けている。高さ28.4cm。

## さまざまな模様



147 深鉢の胴部 (P0005)

細い棒で矢羽根のような模様を丹念に描き込んでいる。  
(縄文時代前期)



148 深鉢の口縁部 (P1631)

棒で描いた模様の上に丸や細長い粘土を貼り付ける。  
(縄文時代前期)



151 深鉢の胴部 (P0013)

2本の粘土紐を握って貼り付けている。  
(縄文時代中期中葉)



153 鉢の胴部 (P0020)

半分に割った竹管の内側の曲線を利用してい る。  
(縄文時代中期中葉)



149 深鉢の口縁部 (P0338)

ソーメン程の幅い粘土紐の上を、半分にした竹管の内部でチクチクと模様をつける。  
(縄文時代前期)



150 深鉢の胴部 (P0001)

粘土を貼り付けた満巻文、空間には竹管ちくかんで丸い模様をつける。  
(縄文時代中期中葉)



152 深鉢の胴部 (P0303)

指で器面を整形した痕を残す。  
(縄文時代中期中葉)



154 深鉢の胴部 (P0433)

竹管状工具を使った複雑な文様。  
(縄文時代中期中葉)

## 細やかな表現と施文技術



155 約手土器の口縁部 (P0378)  
土器の縁に粘土を厚く盛り付けている。  
(縄文時代中期後葉)



156 深鉢の颈部 (P0004)  
粘土紐の渦巻き文と棒で描いた線の連続。  
(縄文時代中期後葉)



157 深鉢の颈部 (P0434)  
縁に貼り付けた粘土紐の上に刻みを入れる。  
(縄文時代中期後葉)



158 深鉢の颈部 (P0006)  
棒で描いた模様の中に縄文を転がす。  
(縄文時代後期初葉)



159 鉢の颈部 (P0572)  
縄文を磨き消して模様にコントラストを付ける。  
(縄文時代後期前葉)



160 深鉢の底部 (P0108)  
土器をつくるときに敷いた木の葉の痕がついでいる。  
(縄文時代中期中葉)



161 深鉢の颈部 (P0285)  
器面を木のへらで削って整形している。  
(縄文時代後期前葉)



162 鉢の底部 (P0578)  
土器をつくるときに敷いた編み物「網代（あじろ）」の痕が残る。  
(縄文時代後期前葉)

# 東畠ムラの土器たち

時がたち、うつりかわる



163 縄文時代中期中葉の土器

土器のひとつひとつに強い個性がある。生産地の特徴が、かたちや模様にはっきりと残されている。東畠ムラには各地から土器が運ばれてきた。



164 縄文時代中期後葉から後期前葉の土器

かたちのよく似た土器が多くなる。煮炊きにつかう底の深い土器は大きさも共通性がある。犀川流域の土器と千曲川流域の土器が混ざり合う。

# 分析レポート1

## 土器付着物や炭化材から年代を測る

SB95号住居跡から出土した土器の“おこげ”的な付着物と、床面上に残っていた炭化材の年代を測りました。その方法は、炭素14 ( $^{14}\text{C}$ ) という、時間経過とともに減っていく性質をもつ物質の量をはかることで、何年前のものかを決める方法で、「炭素14年代測定法」とよばれます。まず、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室で、汚染を除去するために化学的に洗浄し、測定するため形を調製しました。加速器質量分析計による $^{14}\text{C}$ 測定は、東京大学原子力研究総合センターのタンデム加速器施設 (MALT、機関番号MTC) で行いました。

年代データの $^{14}\text{C}$ BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した $^{14}\text{C}$ 年代（モデル年代）で、加速器で測定した $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比により、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比に対する同位体効果を調べ補正した $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、 $^{14}\text{C}$ 年代値が得られます。ただし、これは放射性炭素の比率から計算される炭素濃度で、実際には年代ではありません。本当の年代を推定するために、実際の年代がわかっている木の年輪を調べた結果に対比させます。この年輪年代と炭素年代の対比のデータベースは、較正曲線INTCAL98として公開されています。これを「炭素年代を較正する」と表現しており、結果は較正年代とよび、較正された西暦 cal BCという書き方をします。

今回の測定は、同一住居出土の床面上出土炭化材と、費土中の復元可能土器に付着していた“おこげ”的付着物の測定で、おおよそ誤差範囲内で一致した結果を得ることができました。両者の較正年代の確率が、高い確率密度で重なる紀元前3100—2915年の時間幅の中に含まれる可能性が最も高いといえ、縄文中期中葉から後葉の、勝坂3式<sup>1</sup>から加曾利E<sup>2</sup>・曾利<sup>3</sup>成立期の年代としてとらえられます。焼町土器の年代を測定した例として、貴重な測定例となりました。  
（詳細はDISC-1参照）

【国立歴史民俗博物館平成16年度基盤研究「高精度年代測定法の活用による歴史資料の総合的研究」（代表 今村峯雄）の成果による】

小林謙<sup>1)</sup>・坂本 稔<sup>1)</sup>・尾崎大真<sup>1)</sup>・新免歳靖<sup>1)</sup>・松崎浩之<sup>2)</sup>

1) 国立歴史民俗博物館

2) 東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部門



165 測定前の試料処理

汚れを落とし試料を整える。  
（国立歴史民俗博物館  
年代測定試料実験室）

試料番号	測定機関番号(加速器)	δ $^{14}\text{C}$ %	$^{14}\text{C}$ BP	暦年較正cal BC(2σ)	
				(%)	確率密度
P0002 SB95 ピット6内出土土器	NNMS 3	MTC-05221	-30.44	385 ±40	3255-3240 1.6%
					3100-2900 93.4%
SB95 床上出土炭化材	NNMS C4	MTC-05222	-29.9	4425 ±45	3330-3215 22.8%
					3185-3155 4.6%
					3120-2915 7.8%
試料のなまえと出土したところ	機関のNo.	$^{14}\text{C}$ の比率	$^{14}\text{C}$ の比を年代で表記	実年代の算定(西暦表記) とその確立	



166 測定した土器

測定の結果、今から5,100年～4,900年前に使われた土器であることがわかった。



167 付着炭化物（土器の内側）

土器で煮た食べ物の“おこげ”から年代がわかる。



168 付着炭化物の拡大写真

耳かき1杯くらいの量の炭化物から測定する。

# 分析レポート2

## 土器の粘土から産地を探る

### 東畠遺跡出土縄文土器の胎土分析

東畠遺跡より出土した縄文土器について胎土<sup>1</sup>分析を行いました。今回は、主に胎土中の粘土の分類を行うことで、粘土採取地を検討（原産地推定）するための基礎データを得ることを第一の目的としました。

#### 1. 分析資料（試料）

分析に用いた資料をP番号（本報告における土器の個体番号）を用いて表1に示しました。分析資料は計55点。このうち52点は縄文土器、1点（P134）は焼成粘土塊、2点は遺跡内や遺跡周辺から採取した粘土（粘土1.2）です。分析資料は縄文時代各期の遺構より出土したもので、縄文時代中期に属すると考えられるものが多いです。分析資料の時期や型式学的な所見については、表1及び本報告書のDISC-1を参照してください。分析資料の帰属時期、型式学的所見は柳澤亮氏・寺内隆夫氏（県埋文センター）によります。遺跡内粘土の採取は坂北村教育委員会が行いました。

#### 2. 分析方法

##### 2-1. 融光X線分析の方法

胎土中の粘土の分類を行うため胎土の融光X線分析による胎土分析を実施しました。融光X線分析の方法はこれまでの筆者の方法（建石1996、2003他）に準拠しました。

本研究で用いた分析装置は、セイコー電子工業製卓上型融光X線分析装置SEA-2001です。分析条件は以下の通りです。X線発生部のターゲットRh管球、加速電圧 15kV、加速電流 100~150 μA、照射径 1~3 mm、検出器 Si (Li) 半導体検出器、室内霧囲気 真空、測定時間 300秒、測定回数5回。定量分析は装置設備のファンダメンタルパラメーター法によった（標準試料なし）。

分析対象とした元素はSi, Ti, Al, Fe, Mg, Ca, K, Mnの8元素です。土器胎土の主成分元素組成は、岩石学の慣例にしたがい酸化物として表記しました。本研究では標準試料を用いなかったため、定量には優れませんが、各試料間の比較や傾向を知るというレベルでは影響ないものと判断しました。また、Naについては本条件での定量が困難なため測定ませんでした。

土器の原料を粘土と河川砂等の混和材<sup>2</sup>とを混ぜ合わせたものと仮定すれば、土器胎土中における粘土と混和材の明瞭な識別・分離は困難です。本研究では肉眼で確認できる大粒の鉱物・岩片粒子を混和材に由来する可能性が高いものとして、X線照射範囲から極力外すことで対応しました。この際、資料にマスキングをすることで、X線照射範囲を通常（3 mm）から1 mm程度まで調節して測定を行いました。

#### 2-2. 胎土の不均一性の問題への対応

同一個体内における胎土の不均一性を考慮し、まず個体ごとに測定位置を変えて5回ずつ融光X線分析を実施した後、個体ごとの分析結果のまとまりをみるために、すべての測定結果をクラスター分析<sup>3</sup>に供しました。クラスター分析の結果、5回の測定結果が同一クラスター内に収まった個体については、5回の平均値を算出しこれをその個体の粘土の化学組成としました。

5回の測定結果がばらつく個体については、さらに6回目、7回目の測定を実施し、5つ以上の測定結果が同一クラスターを形成した段階で5回の平均値を算出してこれをその個体の化学組成としました。今回の分析では7回以上の測定が必要だった個体はありませんでした。クラスター分析にはSPSS社製多変量解析ソフトSPSS (11.5J) を使用しました。

#### 3. 分析結果と考察

表1に融光X線分析による胎土分析の結果を示しました。

土器胎土中に含まれる、風化鉱物である粘土の採取地等を検討する場合、風化による影響の少ない理想的な岩石との単純な比較は好ましくありません。特に化学組成の検討では、風化の過程で溶脱する成分の存在を考えておくことが重要です。図1は、比較的溶脱による影響が少なく母岩の状況をある程度反映すると考えられるSiを横軸に、Feを縦軸にとったものです。この図では、各プロットが概ね負の相関を示すことが理解できました。ここには示していませんが、新鮮な火成岩の分析結果もほぼ同一のライン上にプロットされます。図1において、分析結果が左上側にプロットされる個体ほど塩基性よりの粘土に由来する胎土をもち、分析結果が右下側にプロットされる個体ほど酸性よりの粘土に由来する胎土をもつと考えられます。

図1によれば、型式学的所見により斜行沈線文系、勝板式、焼町、唐草文系等にまとめられた土器群は、それぞれ胎土の特徴に一定のまとまりが認められることがわかります。また、遺跡内採取粘土（粘土1,2）はいずれも、今回分析した繩文土器、焼成粘土塊の粘土の特性とは異なる特性をもつこともわかりました。

今後、混和材と関わる可能性の高い大粒粒子に焦点を当てた分析やより詳細な型式学的検討を実施した上で、より具体的、総合的な考察を行なう機会を持ちたいと思います。

建石 徹（東京藝術大学大学院美術研究科）

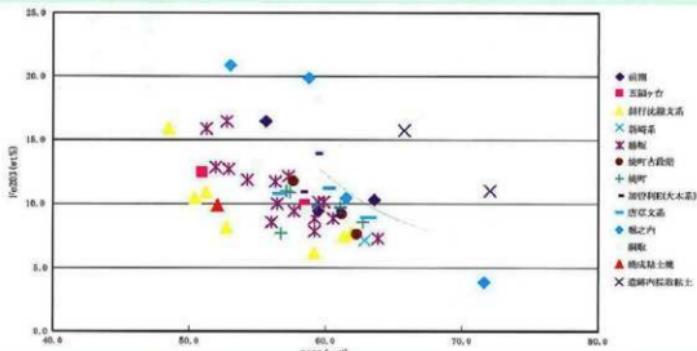
### 謝辞

本研究を実施するにあたり、柳澤亮氏、寺内隆夫氏をはじめ長野県埋蔵文化財調査センターの皆様には、多大なご教示・ご協力をいただきました。寺崎裕助氏、長田友也氏、津村宏臣氏には資料採取時等にご一緒いただき、多くのご教示をいただきました。二宮修治氏には胎土分析の方法全般について多くのご指導をいただきました。

また、本遺跡の地権者である小林久廣氏には、発掘調査終了後にも関わらず遺跡周辺で産出する粘土の採取を許可していただき、さらに、周辺での過去の粘土の利用法やその採取地点等について多くのご教示をいただきました。

皆様方にこの場をお借りして感謝申し上げます。

図1 東畠遺跡出土繩文土器の胎土分析結果 (Si-Fe)



# 石でつくった道具

## さまざまな石器

縄文時代の人々は、自然環境と共生して、身边にある材料をとても上手に利用しています。石器も自然素材である石を加工してつくりだした道具です。その種類は多く、東畠遺跡でも30種の石材を用いた29種類、3,628点の石器が出土しています。使う対象物にあわせて石材を選び、加工方法を工夫し製作された石器には、その石材の光沢ばかりではなく、先人の残した、技術水準の高い確かな製品としての魅力に満ちています。



169 石矢頭(矢じり)

弓矢の先に付ける狩猟具。遺跡全体で571点出土した。石材は黒曜石やチャートが多い。右下(3549)は長さ2.9cm。



170 石錐(ドリル)

動物の皮や骨、木などに穴を開ける道具。つまみがあるタイプと棒状のタイプがある。右下(3592)は長さ5.4cm。



171 三脚石器(左上)と石匙(ナイフ)

三脚石器の用途は不明。石匙は、つまみの付く小ぶりのナイフ。皮剥ぎに使われたとも考えられる。右下(3550)は長さ7.3cm。



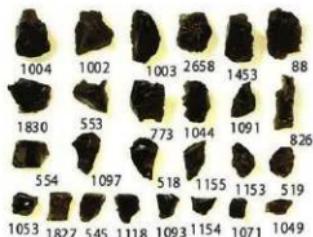
172 色とりどりの石器

いろいろな石材の利点を生かして、様々な道具をつくり出している。右下(1496)は長さ5.4cm。

## 小さな石器、大きな石器



173 つりねりがねじゅう  
釣針形石器と  
石鍤（石のおもり）  
釣針形石器は非常にていねいにつくられている。黒曜石製。長さ3.1cm。非実用品か。砂岩でつくられた石鍤は、十字に入れた溝に糸を巻きつけて、釣り漁や網漁に使う。長さ5.4cm。



175 黒曜石の原石と石核

石器の素材。遠く八ヶ岳一帯に産地がある。東畑追跡でも石器づくりが行なわれていた。拾え切れないとほど細かなチップも出土している。右上（88）は縦5.2cm。



177 ていがくじき  
定角式の磨製石斧  
断面が長方形の磨製石斧。木を加工する道具。石器として糸魚川付近から持ち込まれた。左下（26）は高さ10.1cm。



179 なまこいせきふ  
打製石斧  
土を掘る道具。堅穴住居を掘ったり、ヤマイモを掘ったことだろう。貢岩や麻績川にある砂岩を石材にするものが多い。右下（1816）は長さ13.7cm。



178 水晶の石器  
四阿星山に産地がある。硬い石のため、さりや叩く道具に使われた。右上（2544）は長さ42cm。



179 その他の石核  
チャートや頁岩といった堆積岩も大切な石材である。右下（637）は縦7.2cm。



180 なまこいせきふ  
乳棒状の磨製石斧  
木を切り倒す道具。定角式より厚みがあり長く重い。右上（2173）は長さ14.2cm。



181 石皿と磨石・敲石  
当時の主食である、ドングリやクルミを加工する道具。生活の必需品。石皿の長さ46.5cm。

# 分析レポート3

## 石器からみたムラの生活

東畠遺跡からは計3349点の石器が住居跡内から出土しました。これらの石器は当時の人々の生活道具であり、食料調達に使った石器、調理に使った石器、大工道具として使った石器、または石棒のようなお祭りの道具や、垂飾り・耳飾りなどのアクセサリー類まで様々な種類があります。これらのうち、食料調達に使った石器や、食料の調理・加工に使ったと考えられている石器から、東畠遺跡でどのような生業が行われていたのか、または、時代ごとに変化があるのか分析してみましょう。

方法としては、まず生業対象物がある程度判明している石器について、それぞれの対象物ごとに分類します。今回は大きく3種類に分類しました。

☆狩猟活動に用いられた石器群=石鏃・石槍、ていねいにつくられた小形の石匙

○対象物…シカ・イノシシなどの動物。

○石鏃・石槍=石鏃は弓矢の先、石槍は槍の先に着け、狩りに使った道具。

○小形石匙=獣物の解体に使ったと考えられていい

る道具。

☆植物質食糧の採集に用いられた石器群=打製石斧、横刃形石器、粗くつくられた大形の石匙

○対象物…ヤマノイモ・ユリ根・クズ・ワラビ根などの根菜類と山菜類。

○打製石斧=土掘り具と考えられており、根菜類の採集に使った道具。

○横刃形石器・大形石匙=植物の切削に使われたと考えられ、山菜類などの採集に使った道具。

☆植物質食糧の加工に用いられた石器群=石臼・磨石・凹石・敲石

○対象物…ドングリなどの木の実。

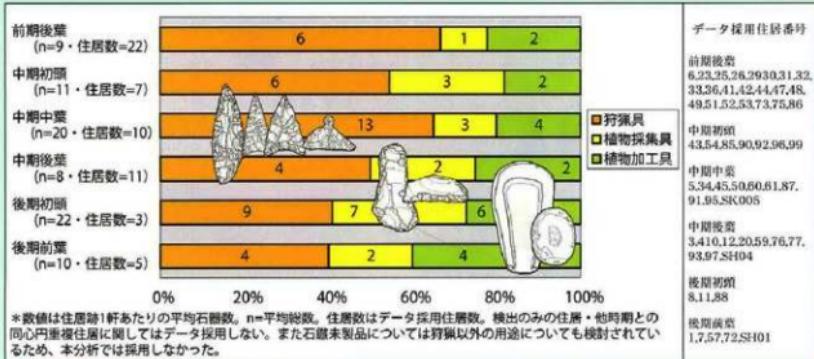
○凹石・敲石=木の実の殻を割る道具。

次に住居跡から出土したこれらの石器数を時期ごと（縄文時代前期後葉・中期初頭・中期中葉・中期後葉・後期初頭・後期前葉）に集計し、各石器群の割合（%）を計算します。

下のグラフがその結果です。3種類の生業のうち、東畠遺跡では狩猟活動が盛んであったようですが、中期後葉以降は植物質食料の利用が増えているようです。後期前葉ではドングリなどの木の実の利用が盛んになったようです。また同じ東筑摩郡の山形村殿村遺跡・淀の内遺跡、朝日村森久保遺跡などでは中期中葉に植物質食料の採集活動がとても盛になるのですが、東畠では狩猟を中心であり、他遺跡と異なった様子を示しています。

石器からみた分析では、東畠遺跡では全体的に動物質食料と植物質食料をバランス良く取り入れた生業が行われていたようです。また網漁に使う石錐が1点出土しています。近くの麻績川で、季節になると遡上してくるサケ・マスを対象とした漁撈も行われていたことでしょう。

伊比博和



181 石器種組成からみた時期別の生業

# 人々が食べていたものは何か

## 遺跡からみつかった動物の骨

住居跡を掘っていると、白くてもろい石のようなものがたくさん出てきました。よくみると「骨」であることがわかりました。

その総重量は2364.8 gもありました。とても細かく割れています。地点別の出土量をみると、覆土が厚く、土器や石器もたくさんみつかる住居跡から多くみつかっています。これといって特別な出土状況はありませんでした。

みつかった骨は洗浄して乾燥して保管してあります。ではこの骨はどのような動物なのでしょうか。

京都大学靈長類研究所の茂原先生に「どの動物の、どの場所の骨なのか」を調べていただきました。そうすると、1点以外すべて焼けている骨であること

がわかりました。

また98点について動物の種名と部位がわかりました(185グラフ)。そうするとイノシシとシカがその大半を占めていました。またウサギやカエルと考えられる小さな動物の骨もみつかりました。

石器による解体痕(カットマーク)が残っている例も2点みつかりました(183)。



182 焼けていない骨

S875出土。割れてまとまっている。種不明。長さ12.4cm。



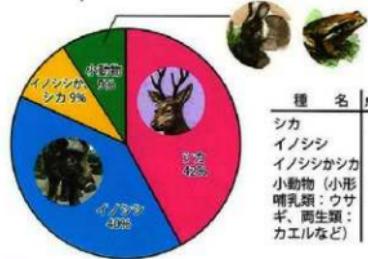
183 解体痕のある骨片

石器で解体した痕がみられる。種不明。長さ2.6cm。



184 S8045号住居跡出土の骨片

覆土などから計370gの骨片が出土。よく焼けている。



185 同定された骨の種別比

魚骨などはみつかっていない。

内陸の遺跡では焼けた骨が多く出土する例があります。それにはお祭りや折りといった特別な意味があるといわれています。

東畠の出土例は何を示しているのでしょうか。いまのところ特別な意味があるのか、単なる「たべかす」なのか分かっていませんが、内陸遺跡の貴重な出土例といえるでしょう。

→詳細な同定結果はDISC1へ



186 シカの骨

S8097出土。すべて焼けている。右長さ4.2cm。



187 小動物の骨

3272-1がウサギ(?)、3273-2がカエル(?)と同定された。右上長さ1.2cm。